水と遊び　水に学ぶ

世話人　山口　拓郎

”風と遊び風に学ぶ”いい言葉である。エコロジー誌「街の風」の随筆欄の名称である。今回はそれをもじって標題とした。

９月度作戦ーカワセミが舞った

開戸親水から下堰親水までの間１．５Ｋｍの清掃作業と決まった。この地区は４月に清掃したが、それから５カ月ビニール袋やビンの塵芥が目につくようになつていた。

前々日、辰濃さんからお電話を頂戴した。朝日新聞で論説委員を務められ天声人語を執筆された方だ。今はエコロジー誌「街の風」に随筆を掲載されている。９月度作戦をお話したところ早速「お伺いしましょう」と云うご返事だつた。

９月９日、朝から真夏を思わす太陽がジリジリ照りつけていた。

駅裏で川に投げ込まれ無残な姿を晒している自転車の残骸をカメラに収める。「ゴミフェスタ」に展示するためである。

開戸親水へ急ぐ。既に数名が集まっていた。山本さんが新たに加入して下さることになる。

大歓迎である。

９時３０分　　定点観測開始

ほどなく辰濃さんがカメラを肩にみえる。挨拶もそこそこに取材に入って頂く。

１０時、清掃作業開始

合流点から川上に向かってゴミを拾いながら進む。ところどころ深い淵があるので用心が肝心だ。

４月にキレイにしたのにまたおびただしいゴミだ。袋が一杯になると上から声をかけてロープで引き揚げる。息の合った作業が続く。砂に埋もれた自転車はびくともしない。二人がかりでひっぱつたが諦める。

引き揚げた袋を下堰親水場に集積、２時間の作業を終わる。

自転車１台・鉄材・消火器・ビン・カンゴミ袋１５個・・・。

戦利品を前に晴れやかな顔でカメラに。

「あの石の上あたりで時々石亀が甲羅を干しているんですよ」辰濃さんに説明しているとカワセミが一閃水面をかすめて

六十歳の人がいる。しし歳の人もいる。みな「真光寺川を清流にする会」の腕章を巻いている。自分たちの川を自分たちの手できれいにしようと志す人たちだ。会員は一九名で、平均年齢は六十九歳を超す。

■

現場は東京の町田市を流れる真光寺川という小さな川だった。昔の流れは田畑のなかを蛇行していた。水もゆたかで、魚影が濃かった。

■

コンクリートで固められ、直線的な川になって、すべてが変わった。会員の一人がいう、「川が排水路みたいになってからゴミがふえだしたんです」。人と川は隔てられ、川は汚臭を放ちだした。

■

九月の日曜日、現場を訪ねた。みな、網状の袋を片手にして下流から上流へゴミを拾ってゆく。[illegible]の齢の老人も、ズボンを膝までまくり上げて川に入っている。

透明度を調べる

「清流」を創る

辰濃　和男

会はいま、定期的に透明度の定点観測とゴミ拾いをしている。空き缶、ペットボトル、犬の糞を入れたビニール袋、建築廃材、自転車、下着、とゴミの種類は多い。

「なんでも捨ててゆくなあ」

作業衣の背に汗がにじんでくる。

「お、びくともしねえ」

一人が流れのわきの泥にへばりついたゴミと格闘している。

■

すでに十台以上の自転車を引き上げた。「力のある連中が捨てて、力のない連中が引き上げてるんですよ」。笑い声があった。岸に積み上げられたゴミは都や市の回収車が運ぶ。清流を創るには、生活排水の浄化という根本策が必要だが、それはこれからの課題だ。

■

一瞬だった。流れに沿って飛ぶカワセミの羽が青緑色に光った。コイ、ドジョウ、モロコ、ナマズ、ザリガニ、イシガメ、セキレイ、カモ、鷺。運動は今年から始まったばかりだが、よみがえりつつある清流が生きものを呼び戻している。

■

参加者の話を聞いた。

「この川の辺は私の散歩道なんです。以前はきったねえなあと思うだけでしたが、いまは、自分で体を動かし、気持ちがいいですね」（53歳）

「黙ってゴミを拾っていれば通る人にわかってもらえますしね。生きものもふえてきましたよ」（[illegible]歳）

「疲れるけれど、川がきれいになってゆくのを見ると、気分がいいですよ。すばらしい仲間ができたのもうれしいですね」（[illegible]歳）

「きょう初めて参加したんです。川が汚れているのには驚きました。いい汗をかきました」（60歳）

■

会の活動によって、ここで生まれ育った人たちと、十数年前、あるいは数十年前にここに来た人たちとの結びつきが生まれつつある。

■

ドイツのメルディアン地方に「小川の里親制度」という運動があるそうだ。役所に申し込み、家の前の小川の里親になる。里親は、川をきれいにし、岸に木を植える。一地方で起こったこの試みはドイツの各地にひろがっている（注）。清流の会は真光寺川の里親なんだ、と思った。

■

会の代表、山口拓郎さん（70歳）がいった。「子どもたちにぜひ川に戻ってきてもらいたいし、一緒にゴミを拾いたい。子どもを川から遠ざけるのではなく、川の自然に触れさせたい。小さな危険を経験することで、子どもは自然とのつきあい方を身につけてゆくんです」

五月、朝日新聞のむさしの版にこの会の記事がでた。そのあと鶴川二小の先生が、子どもと一緒に来てゴミを拾った。「これからも一緒にゴミを拾おうと話し合っています」

■

ドイツの例を紹介した本にこんな言葉があった。「もし、たくさんの小さな子どもたちが、たくさんの小さな村で、たくさんの小さなことをしたら、世界はかわるだろう」

[illegible]

（注）[illegible]

17

飛び去った。

例によって「夢庵」で反省会。

冷たいビールが腹にしみわたる。

「来月は上流をやりましょう！」誰かが叫ぶ。

全ク皆サンノ情熱ニハ感動・感動デス。

１０月度作戦ーせいぜい後５年だなー

１０月１４日、爽やかな青空が拡がり絶好の清掃日和である。１０名参加。

またまた嬉しいニュース、杉原さんが新たに我々の仲間に加わつて下さることになつた。

９時３０分　定点観測

川面はゴミ一つなく心地良い眺めである。残念なのは真光寺サイドの洲がいつの間にかブルで削りとられている。折角繁茂した葦も葭も跡形もなく失われている。

「心ない仕打ち」と口々に憤懣を漏らす。

１０時　清掃作業に取りかかる。

下堰親水場から上流に向かう班と神明の調整池下の暗渠から下流に向かう班と二手に分かれる。

前日の雨でやや増水している。所々ある淵では水位が腹部に達し思わず悲鳴を挙げる。そして数カ所の丈の高さほどもある段差が手強い。支えがなく滑り落ちる。

約２時間、両班が中間地点でドッキング。ゴミ袋を集めて、作業完了。当日の戦果はゴミ袋２０個だつた。

神明橋の周囲には未だ田圃が残されている。小高い林を背に稲穂が黄金色に波打っている。のどかな谷戸の風景である。ご夫婦が収穫作業をしていた。「田圃をやれるのもせいぜい後５年だろうな・・・」と云うお話だつた。

容赦ない開発の波・後継者問題・税制等谷戸の里山は追いつめられているようである。「これでいいのだろうか？どうにかならないものだろうか！」皆の胸をそう云う思いがよぎった。

１１月度作戦ー子供達の目が輝いたー

神蔵さんに「真光寺川の今昔」を聞く会とした。伝承によると神蔵家の先祖は源平の昔能ヵ谷に定着したと云う。神蔵さご自身は創業７０年の鑿井会社の御当主である。真光寺川の水で産湯をつかい、真光寺川を庭に育つた生き字引のような方である。

１１月１１日１１時　定点観測

８名集合。秋の柔らかな日射しが快い。

子供達の声がする。鶴川三小・５年生の駿・ケイ太・建一君の３名だ。先日、下堰親水場に釣り来ていた。「魚の面白い話が聞かれるよ。」と声をかけておいた。

「やっぱり来てくれたか」と嬉しい。

背丈順に並んで「大・中・小です」と剽軽な挨拶をする。観測に加つてもらう。

矢継ぎ早の質問である。

「少年隊」として仲間に加わつてもらうことにする。

「いちょう会館」へ席を移す。

和室で車座になつて昼食をとりながら伺うことにする。

”　少年の日、この辺りは人家も疎らだつた。真光寺川は谷戸を潤す清流だつた。ギバチ・オトンキョウ・ドジッポ・・”

神蔵さんは無類の魚好き釣り好き。

会員にも負けず劣らず同好の士が多い。

そして子供達も・・・。「話が長いからもう帰ってもいいよ」子供達にそう告げたが目を輝かしき動こうともしない。

神蔵さんも会に入りたいとおつしゃる。旧家の方が仲間に参加されることは会が地元に深く根を下ろす意味合いから一層喜ばしいことだ。

棲息する魚を水槽に入れて子供達に見せたい。魚を放流したい。・・・

次々と夢はふくらむ。

アッと云う間の３時間だつた。

終わって皆で神蔵家へ伺い見事な池を拝見して散会した。